



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新渡戸稲造の欧米留学と女子教育観の形成過程：津田梅子との比較を通して
Author(s)	渡辺, 崇子
Citation	基督教學, 45, 10-18
Issue Date	2010-08-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47477
Type	journal article
File Information	SC45_002.pdf



新渡戸稲造の欧米留学と女子教育観の形成過程

―津田梅子との比較を通して―

渡 辺 崇 子

本研究では新渡戸稲造（一八六二―一九三三）が女子教育について初めて明言し、傾倒していったのが欧米留学時代（一八八四―一八九二）であることに着目し、この時期にどのように新渡戸の女子教育観が形成されていったのかを彼が当時寄稿していた『女学雑誌』（一八八五年七月二〇日創刊）、フレンズ派の刊行物、新渡戸の書簡を通して検討する。あわせて、同時期に女子教育の分野で活躍した津田梅子（一八六四―一九二九）の当時の言動もみながら二人の女子教育観の比較を試みる。

一．米国留学時代

米国留学時、最初の新渡戸の考える日本における女子教育をフレンズ派の刊行物『Friends' Review』に掲載された一八八五年六月十日付の書簡にみることができる。新渡戸は宣教師夫妻の派遣を提案する中で、その夫人には日本の少女たちに裁縫や編み物や刺繍を教えることを要望している。^{〔1〕}一八八五年十一月十三日付けの宮部金吾宛の書簡には遠友夜学校構想の中で学校に「女子部を設け、女子に刺繍・裁縫・編み物を教え、邦語の外に英語をも教えるようにする^{〔2〕}」と述べている。この時点では、新渡戸の女子教育は当時の日本女性の領分を越えてはいないが英語を教えたいというところに進取性がみられる。

一八八五年六月末、新渡戸がフィラデルフィア・フレンズ派婦人外国伝道会にて日本における女子教育の必要を説いたのがきっかけで一八八七年、普連土女学校設立の運びとなっている。この学校の設立に際し一八八七年三月二七日付の書簡で新渡戸はフレンズ派の人々に次のように助言している。その内容は、女子の地位を向上することが今日の日本の社会において最重要課題であり、近い将来、外国との交際が密接になるため、女子にも英語の勉強が必要であること、フレンズ派が日本人の気質に合うこと、キリスト教的精神を身につけ、日本人としての気質をもった女性を育成すること、女学校は有益な娘、賢い妻、注意深い母となるための課業だけでなく、他人の必要とすることに對して注意の目を開かせ、外部の世界に同情を寄せることのできるような女性を育成すること、具体的に看護婦、病院の付添婦、慈善団体・矯正団体の主事などにもなるコースを取り入れることを提案している。³⁾

このことは、新渡戸がのちに妻となるメリーをはじめとする慈善事業や女性の地位向上に熱心なフレンズ派の女性たちとの密接な交流を通して新渡戸の考える女性の教育の範囲が、家業だけではなく社会活動にも広げられてきていることを示している。

米国滞在中、新渡戸はフレンズ派以外の婦人とも接触し、女性についての見聞を広めている。『女学雑誌』八五号（一八八七年十一月十九日刊行）によると新渡戸は万国婦人職業同盟の会長であり、『ウォーキングウーマン』と言う雑誌の持ち主であるチャールロツテスミス夫人を訪問し、彼女の雄弁かつ驚くべき談話に圧倒されたと述べている。新渡戸はこの夫人と日本女性の地位を向上させることについて議論したとも記している。また、インドのラムバイ（英国チエルテンハム女子大学ヒンズー語教授）という女性がインドの女性について本を書いたこと、その文章が立派であること、彼女が最近アメリカに滞在しインドに学校を設立するための資本金募集に奔走していること、彼女とも会って話がしたいと述べている。そのほかアメリカでの女性の社会的な活躍および能力の高さに新渡戸は感心しつつ現地の女性の状況を『女学雑誌』の読者に伝えている。

二. ドイツ留学時代

一八八七年、欧州に渡ってドイツに留学した新渡戸は宮部金吾への書簡（一八八七年八月七日付）で「札幌に貧しい人々や官吏のために夜学校を設立し、女学校を設立したい」と述べ、夜学校とは別に女性のための学校を作る意欲を表している。『女学雑誌』一一〇号（一八八八年五月十九日刊行）で新渡戸は、女性への具体的な提案として①勝手本をきまりよくし②理学を用いて機械を備えること③日本は滋養が不充分であることをドイツ・アメリカの食費に占める家計の割合を提示しながら解説し食事の改善を促し④けむり出し（煙突）、家屋の改良の必要性を説いている。女性がもつとも技量を發揮する場所である台所を改良し、家事の効率化を図ることによって女性に自由な時間ができ、色々なことができるというのである。

一八八六年七月一日付けの新渡戸の書簡では「洋装流行について日本女性の着物のように良いものまでも西洋化されて洋服に変えられてしまうのは遺憾だ」という梅子の意見に同感であったのが、一八九〇年四月五日刊行の『女学雑誌』では「今日の実生活上、活動の服装としては洋風化するのには必要である」と述べている。このように新渡戸は衣食住をはじめ日本女性の生活の改良を読者に勧めている。

『女学雑誌』一一一号（一八八八年五月二六日刊行）では新渡戸は「女況改良の三つの楷梯」という言葉を用いて女性の地位向上を三つの段階に分けて説明している。第一段階は台所、第二段階は客室、第三段階は演壇。言葉を言い換えれば、まず家内、次に社会、最後に政治である。新渡戸によると日本は第一の段階から第二に進もうとしている状態で、女性の社会における位置を進めるには「寛やかに実直に計画する」ことが必要であると述べている。

『女学雑誌』二〇三号（一八九〇年三月八日刊行『家政は一つの学術也』）では、ベルリン大学留学時、余暇の時に家政の授業を傍聴していたことを述べ、自らの女子教育への思いを次のように語っている。「自分の学課は直接女子教育と関係ないようにみえるが自分は一日もこの問題を忘れたことはない。それはこの問題が人類の自由および進歩

に大いに関係があると確信するからである。近い将来、女学校設置の必要をしきりに痛感する。帰国後、女性のために一臂の力を尽くしたいと思う」この文章から新渡戸の強い日本での女子教育への意気込みが感じられる。

『日米関係史』（一八九一）の「女子学生」の項目では、日本の女性史を踏まえた上で現在の世情に合わせた新渡戸の女子教育の提案は次のとおりある。「現在、女性の立場における教育の欠陥は、想定される女性の生来の無能力や女性に割り当てられた低い地位によるというよりむしろよりリベラルな教育（アメリカを模範とする人間の能力を幅広く、バランスのとれた実力のあるものにし、人格を完成させる教育。筆者註）の不足にあると考え、若い女性もその男性の伴侶として十分であるために西洋の教育を受けることが望ましく、女性の真の発達のために家政学を適応させ、家庭を通して国の道徳上の性質を強化すること」と述べている。⁶ここに米国とドイツの双方の利点を取り入れた日本に導入すべき新渡戸の女子教育論が提示されているのである。

三、梅子の二度目の米国留学

次に、新渡戸が欧米留学していた頃の津田梅子の女子教育に関する言動を見ていく。

二度目の米国留学⁷をしていた梅子は一八九〇年の夏、日本で一年間、英語教師として教えた経験のあるアリス・ベーコンの日本女性についての著述を助けたことがきっかけで自らの事業が日本の女子高等教育開拓の分野にあるのではないかという考えに至る。そのおもな理由は梅子の自叙伝ともいうべく伝記の中で次のように述べられている。

- ・ 維新後、二〇余年経つが未だに日本は古い習慣に囚われ女子には教育の機会が与えられていないこと。
- ・ 女学校は近來増してきたが男子の中学校に比べてはるかに数も内容も劣ること。
- ・ 高等教育は、教員養成を目的とする女子高等師範学校のほかにはなく、天賦の才能を持ちながら、教育の機会が

ないために十分その才能が伸ばせないのは本人にとっても不幸なことであるし、社会的にも多大な損失であること。
・少数ではあるが目覚めた女性はずでに高等教育を望んでいて、こうした女性に教育の機会を与えるべきであること。⁽⁸⁾

こうして梅子は自分の生涯の事業は日本における女子高等教育の開拓であることを決意する。

この留学中、梅子は自ら享受した教育の機会を日本の女性たちにも与えたいと思いモリス夫人と相談し、⁽⁹⁾ 八千ドル集めてその利子で三―四年ごとに一人学生を送るように計画し、一八九一年九月、モリス夫人の率先によって奨学金基金募集のための委員会「日本婦人米国奨学金」が設立された。梅子は在学二年目から研究の合間をぬってこのために奔走し、講演、訪問、事務を行った。この頃のフィラデルフィアでの梅子の演説からみられる彼女の女子教育観は以下のとおりである。

- ・女性 新しい時代の変化と状況に合わせて変わらなければならない。
- ・欧米諸国と同等のレベルに立つためには日本の人口の半分以上を占める女性の地位を向上させ教育を与えなければならない。
- ・広範囲な教育、新しい雇用や活活の手段を習得することによって女性の自立が可能となる。
- ・今日、以前の日本には存在しなかった多くの社会的、道德的悪が増大している。男性は旧来の障害を打ち壊し、以前と同じ制約をもっていない。この時代の変化によって男性はより大きな自由を持っている。この危機においてキリスト教と組み合わされた教育が日本の女性に前進させる力を与え、女性の前にある大きな仕事に取り組むことが可能である。⁽¹⁰⁾

梅子は当時、上流階級の子女のための学校で勤務し、上流階級の人々との交流があったこともあってこの階級の子女を教育することに特別な意義を感じている。そして彼女たちに最も強力な影響を持つことを期待している。梅子によると彼女たちには今まで控えられていた学習機会が提供されているのだが、知識のみでは彼女たちの心の大きな渴望は満たされることはないだろうとのことである。彼女たちの幸福は彼女たちが受ける教育にあるのではなく、教育はキリスト教と組み合わせなければならないのである。しかし現実には、教養のある日本人クリスチャン女性や先生はほとんどいない。生徒たちを訓練し、手助けする日本人の先生の養成が必要である。なぜ日本人教師でなければならぬかという点、この高い階級の人たちはキリスト教に対して非常な偏見を持っており、聖書を教えようという一つの目的でやってくる宣教師の女性は上流社会の輪に入ることができないし、彼女たちは保守的で外国人が習得するのにかなり難しい礼儀作法に心を用いているからだ。よい教育を受け、教養がある日本の女性であるならば、その人自身が高い地位の人でなくても教師として高い地位の家庭に職を得ることができ、教育を通してキリスト教を教えることができる。そこで、日本人女性教師を養成するための奨学金基金が必要となるのである。¹¹⁾

梅子はこのように現状を述べ、奨学金の中金について次のように明かし聴衆に協力要請を行っている。すなわちこの奨学金はすべての日本女性に開かれたものであり、異なった町々で競争試験が行われ、日本の委員によって候補者が選ばれる。試験は、英語だけでなく大学で学ぶようにするための一般教養科目、それに日本語と日本文学である。日本の委員はキリスト教の広がりや女性の地位向上を願っている男性と女性から構成される。高等教育の先生ならびにすぐに政府や私立の学校に入ることのできる日本女性はアメリカの方法を用いて日本女子を教育し、模範とキリスト教文明の恩恵である規範をもって彼女たちを教える。そして、この奨学金の目的は先生にふさわしい大学教育、医学教育、工学教育の三つからなり、留学先はフィラデルフィア近郊の大学——プリンマー大学、ペンシルバニア女子医科大学、ドレキセル工科大学を候補としてあげている。¹²⁾

こうして梅子たち委員の働きにより一八九三年には目標額の八千ドルに達し、次の年、厳しい審査で選ばれた松田道（帰国後、同志社女子専門学校校長）、を皮切りに河井道（惠泉女学園創設者）などもこの奨学金で留学している。

四、新渡戸と梅子の女子教育観の比較

新渡戸と梅子の女子教育観を比較したとき、共通項として次の三つがあげられる。

まず、二人の女子教育観の根底にあったものはキリスト教信仰——つまり、すべての人間は男女に関係なく神の前に平等であること、そして自らの境遇に甘んじることなく彼らに与えられている神の愛が他者への同情と相俟って行動となって表れている。

次に、二人に共通することは日本女性の良いところを失わずに、新しいものを取り入れようとしていることである。例えば、新渡戸はフレンド学園設立に際し日本人としての気質をもった女性の育成を提案し、梅子は「日本婦人米國奨学金」の受給者は日本人としての教養（試験科目に日本語と日本文学がある）を身に着けていることを条件としているところに見られる。

最後に、二人は男性同様女性にも西洋の教育を受けさせることを希望している。これは新渡戸、梅子共に自ら受けた教育背景からもきている。

次に二人の教育方法においてだが、新渡戸はクエーカーが日本人の気質に合うのでフレンズ派の人を日本へ送って女子の教育を行うことを提唱した。また、女学校において家政学を実践し、家庭を通して国の道徳を強化していくという一般的な日本女性の現状にみあったやり方で、徐々に女性の地位の向上を図るという方法に対し、梅子は日本女性を教育者として米国で育成し、これらの女性たちを教育の任につかせ、女性の社会進出、自立を促し、男性とともに日本の発展に寄与するという当時としてはかなり進歩的な方法でもって女子教育を行おうとした。梅子の場合、キ

リスト教と組み合わせた教育を行うとのことであるが宗派に関しては特に明言していない。

おわりに

新渡戸が札幌農学校卒業頃から抱いた女子教育への思いは、欧米留学を通して確信となり、日本で本格的に女子教育に取り組む方法を模索し、確立していった。一方、梅子は最初の留学から日本に帰ってきて、梅子を含めた日本女性を取り巻く環境の厳しさや男女間にある大きな格差に失望したが、理解ある家庭の中で冷静、沈着に物事を受けとめ、与えられた機会を生かし、アメリカ女性を模範とした日本女性の地位向上に努めた。

今後の課題

日本の女子教育のバイオニアと呼ばれる新渡戸稲造と津田梅子が留学先から帰国してからどのように女子教育を推進していったのか、時代とともに彼らの女子教育観にどのような変化がおこり、どのように対処していったのかを検討していく。

注

- (1) 新渡戸稲造、新渡戸稲造全集編集委員会『新渡戸稲造全集』二二卷（教文館、一九八六年）九―十二頁。
- (2) 新渡戸稲造『新渡戸稲造の手紙』鳥居清治編訳（北大図書刊行会、一九七六年）六六頁。
- (3) 新渡戸稲造、新渡戸稲造全集編集委員会『新渡戸稲造全集』二三卷（教文館、一九八七年）二四六―二四九頁。
- (4) 『新渡戸稲造の手紙』九一頁。

- (5) *The Autic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother*, eds. Yoshiko Furuki, et al. (New York and Tokyo: Weatherhill, 1991) pp.253-254.
- (6) 新渡戸稲造、新渡戸稲造全集編集委員会『新渡戸稲造全集』十三卷（教文館、一九七〇年）五二五―五二八頁。
- (7) 当時、梅子は華族女学校（学習院女子の前身）で英語教師をしていたが、よりよい教師となるため、そして高等教育をうけるため研究休暇の許可を受け、一八八九年九月からプリンマー大学に留学していた。
- (8) 吉川利一『津田梅子』〔一九三〇年〕（中央公論社、一九九〇年）一六一―一六二頁。
- (9) フィラデルフィア当地有数のクエーカー教徒。
- (10) 津田塾大学編『津田梅子文書』（津田塾大学、一九八〇年）二二―三二頁。
- (11) 『津田梅子文書』一二五―一二六頁。
- (12) 『津田梅子文書』一二六―一二八頁。